

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2018

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2018



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

はじめに

2019年5月、30年に及んだ平成の世は終わりを告げ、新元号の下で新たな時代が始まりました。バブル崩壊やリーマンショックという大きな経済の波や、中国の台頭を始めとする世界情勢の変化、少子高齢化による人口減少局面の到来、そして度重なる災害。平成という時代の中で日本が歩んできた道は、その語源となった「内平外成」「地平天成」の理想には遠く、残念ながら相対的、絶対的な衰退局面であったと言わざるを得ないものでした。

大災害に直面したときに、私たちに何ができるのか。立て続けに起こる災害の中で、平成の最後の10年は、こうした問いに常に向き合うことを余儀なくされました。今年度の年報では、2011年3月の東日本大震災の復興に持続的に関わってきた気仙沼大沢地区での復興支援プロジェクトを特集します。手探りの中で模索してきた復興支援の記録と、これからのあり方について再考します。

社会状況の変化に伴い、建築やランドスケイプの担う役割は平成の始まった30年前と大きく変わりました。ただ作れば良いという時代はとうの昔に過ぎ去り、地球環境や社会のありようと密接に関わり、熟考することが求められています。しかし、再生可能エネルギーの利用や建築物の省エネルギー化、縮小局面における既存建築ストックの活用など、取り組むべき多くの課題が日本社会の未熟さ故になかなか進まず、世界標準から大きく立ち遅れてきているのが現実です。

この現状にどう向き合うか、そしてどのような未来に向かってゆくべきなのか。本学科の教育の主題である「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」について、時代の区切りを迎え改めて問い直すべきでしょう。

(西澤高男)

目次

特集

2011年3月11日に発生した東日本大震災。未曾有の大災害を目の当たりにして私たちは何をすべきで、何が可能なのか。建築・環境デザイン学科はもとより、東北芸術工科大学の学生や教員たちは自問自答しながら、手探りで復興のために自分たちができることを模索し、各地で様々なプロジェクトを実践してきました。宮城県気仙沼市大沢地区での復興支援もそうした中のある出会いがきっかけで始まり、以来、復興への歩みを共に見続けてきました。

あの震災から8年。大沢では集落の高台移転が完了し、新たな生活が営まれ始めています。今号の年報では、ハードウェアの復興からコミュニティの再生、そして醸成へという新たな段階に入った気仙沼市大沢地区での震災復興活動の経緯と現状、そして今後の課題について、プロジェクトに関わった学生たちへのインタビューを交えて特集します。

気仙沼市大沢地区復興支援プロジェクト 6

学生インタビュー「大沢に通って考えたこと」 9

教育報

演習課題とその作品を中心に、教育の成果をまとめています。

1年生では、前期にデッサンや立体造形、空間造形といった造形や表現の基礎となる演習を、後期に設計の基本である図学・製図やCADの習得、施工体験といった演習を設定しています。

2年生では、前期の住宅設計課題に続けてその外構となるランドスケープを設計し、建築内外の一体的な計画に取り組みます。後期には建築や環境をデザインしてゆく上で欠かせない現地フィールドでのリサーチ活動や、世の中の事象を多面的に捉えて空間表現につなげる課題を設定しています。

3年生は少人数のスタジオ課題となり、前期前半／後半、後期前半／後半の4つの期間の中にそれぞれ3つずつ設定される課題の中から学生の興味や関心、進路に併せて、履修するものを1つずつ選択します。建築、ランドスケープ、都市や集落のリサーチ、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題も設定し、地域の様々な問題を読み解き提案につなげてゆくトレーニングをします。

1学年 建築・環境基礎演習 10
インテリア基礎演習

建築・環境施工演習 11

2学年 木造建築演習 タイニーハウスの設計 11

住宅と外構の設計 12

フィールドワーク入門

クリエイティブ演習 13

3学年 エコハウスの設計 14

集合住宅の設計 15

市街地計画

リノベーション演習

農村計画 16

小学校の設計

地方都市のまちなかに建つ複合施設

| | |
|---------------|----|
| まちの公共空間となる図書館 | 17 |
| まちの自然エネルギー計画 | |
| 劇場とシネマ通りの再生 | |
| 自然と建築 | 18 |
| ランドスケープ総合デザイン | |

研究報

建築・環境デザイン学科での学びの集大成となる4年生、及びその内容をより深化させる大学院地域デザイン領域での修士課程では、学生たちが自ら課題設定をして調査した内容を、論文あるいは設計というかたちでまとめます。ここでは、こうした様々な課題に向き合った研究の成果をレビューします。

併せて、各研究室や学生・有志によるプロジェクト、学科で主催した各種講演会、そして教員による出版、執筆活動等の概要についても掲載しています。地域の中で実践的かつ持続的な活動を続けているプロジェクトが多く、地域社会と密着した学びの場となっています。

| | | |
|---------|---|----|
| 卒業研究・設計 | 高齢化社会における災害公営住宅の課題とその対策について考える | 19 |
| | 一人暮らしをする学生の部屋の使い方「逃げる」の空間 | 20 |
| | 飯豊町における農地を活用した地産地消の再生可能エネルギー 日本橋・首都高速道路再編化計画 | 21 |
| | 総評・公開審査 | 22 |
| 修士研究・設計 | 空き家に関する研究 地方都市の再開発とエリアリノベーション | 23 |

| | | |
|--------------|-------------------------------|----|
| プロジェクト 環境 | 前明石エコタウンプロジェクト 早戸温泉環境整備実習 | 24 |
| | 川西町メディカルタウン整備検討 ドイツワークショップ | 25 |

| | | |
|------------------|--------------|----|
| プロジェクト セルフビルド | ツリーハウスプロジェクト | 25 |
|------------------|--------------|----|

| | | |
|-------------------|-------------------------|----|
| プロジェクト リノベーション | 山形リノベーションスクール 山形R不動産 | 26 |
|-------------------|-------------------------|----|

| | | |
|------------------|--|----|
| プロジェクト 地域との連携 | 赤湯十分一山環境ツーリズムプロジェクト 北海道江差町 交流振興プロジェクト | 27 |
|------------------|--|----|

| | | |
|--------------|-------------------------------|----|
| プロジェクト 歴史 | 長井市文化的景観 歳プロジェクト 榎下宿の調査 | 28 |
|--------------|-------------------------------|----|

| | | |
|-------|--|----|
| 各種講演会 | 環境的未来型 山田貴宏氏 環境的未来型 河野直氏 ワンデイプロジェクト 瀬川翠氏 | 29 |
|-------|--|----|

| | | |
|------|--|----|
| 執筆活動 | これからのリノベーション断熱・気密編 公民連携の教科書 公共R不動産のプロジェクトスタディ ブルーノ・タウトの緑の椅子 | 30 |
|------|--|----|

気仙沼市大沢地区復興支援プロジェクト



気仙沼市大沢地区は、宮城県気仙沼市の北端、唐桑半島の付け根に位置する集落である。三陸沿岸の集落の例に違わず過去に幾度となく津波の被害を受け、その度に再建されてきた歴史を持つ。昭和三陸地震津波以降は、時間が経過するにつれて国道近くに比較的まとまった市街地が形成され、穏やかな生活が営まれてきた。

2011年3月11日午後2時46分、東北地方太平洋沿岸を中心とした東日本全域を襲ったマグニチュード9.0の大地震は、各地に大きな揺れをもたらすとともに、海岸線に巨大な壁となって押し寄せた津波により多くの人命が失われ、甚大な被害を引き起こした。大沢地区は激しい揺れによる被害は殆どなかったものの、約30分後には津波の第1波が到来し、続けて第2波・第3波が入江の南北から押し寄せた。これまでの津波をはるかに超える規模の浸水高、浸水範囲を記録した津波は、青野沢川を遡上して集落の奥まで押し寄せた。

あの震災から8年の月日が経過した。防災集団移転と漁業集団移転により、集落は高台への移転や交流拠点の整備に一区切りをつけ、集落復興のハードウェア整備から、コミュニティ醸成へと軸足を移す。これまでの軌跡を振り返り、今後のあるべき復興支援のあり方を考えてみたい。

「気仙沼みらい計画大沢チーム」設立の経緯

本学科と大沢地区との出会いは、震災から半年ほどたった2011年の秋である。吉田朗教授（当時）の出身地・気仙沼での復興支援を検討していたところ、竹内昌義教授の知人である神戸大学の槻橋修教授、横浜市立大学の鈴木伸治教授が大沢地区の支援を始めており、そこに加わることとなった。元は槻橋研究室を中心に、東日本大震災で被災した街の記憶を復元する

「記憶の街」模型復元プロジェクトが気仙沼市危機管理課に持ち込まれたことに始まり、当時窓口を担当していた職員が大沢地区出身であることがきっかけとなった。復興の早い段階から「記憶の街」ワークショップを実施し、まちの未来像についての話をしていたことは、その後のまちづくりに大きく寄与したとのことである。

大沢地区で被災された方々の大半は、2011年6月から住宅を再建するまで、地区の避難場所に指定されていた小原木中学校に設けられた仮設住宅で避難生活を送った。そのうちの方々の多くが大沢地区内での住宅再建を願っており、地区外への転出などにより地域コミュニティが崩壊しないよう、集団による高台移転を目指した。

集落の復興は、高台移転や住宅再建、集会施設の再建、国道の改修、防潮堤や河川堤防の設置、そして高台移転後に残される低平地の活用など、多くの事業が並行して進められる。また、その財源や事業主体も防災集団移転促進事業*1（以下、防集事業と表記）や漁業集落防災機能強化事業*2（以下、漁集事業と表記）をはじめとして国や県、市によるものが複雑に絡み

*1 防災集団移転促進事業

災害が発生した地域又は災害危険区域のうち、住民の居住に適当でないと認められる区域内にある居住の集団移転を促進するため、当該地方公共団体に対し事業費の一部補助を行い、防災のための集団移転の促進を図る事業のこと。（引用：国土交通省ホームページ）

*2 漁業集落防災機能強化事業

東日本大震災により相当数の住宅、公共施設その他の施設の滅失又は損壊等の著しい被害を受けた地域の円滑かつ迅速な復興を図るために、被災地の漁業集落において、安全・安心な居住環境を確保するための地盤嵩上げ、生活基盤や防災安全施設の整備等を実施し、災害に強く、生産性の高い水産業・漁村づくりを推進することにより、地域水産業と漁村の復興に資する事業のこと。（引用：復興庁ホームページ）

合っており、住民と行政との間の調整役の存在が求められた。

そこで、大沢地区防災集団移転促進事業期成同盟会（以下、期成同盟会と表記）を立ち上げ、地域住民の意見集約・合意形成・交渉を行うこととなった。そして「帰っぺす大沢さ!」（大沢に帰ろう!）という合言葉のもと、被災された123世帯中73世帯が大沢地区内での自宅、そして集落の再建を目指した。

その思いに応えるかたちで、神戸大学、横浜市立大学、武庫川女子大学、そして本学の建築や都市計画、まちづくりを専門とした大学の、学生と教員によって「気仙沼みらい計画大沢チーム」が設立された。大沢チームは住民と協働した防集事業の推進を主な目的としていたが、そのほかにも以下のような様々な活動を続けてきた。

大沢みらい集会・大沢まちづくり会議

防集事業や漁集事業による高台移転地の宅地造成や集会所再建、国道・三陸道整備、防潮堤・河川堤防整備、移転元の低平地の活用など、復興に関連する事業について関係省庁やコンサルタント会社と住民との間を取持ち、住民側の要望を集約して会議の場で伝えると共に、行政側の提案内容を住民にわかりやすく説明するための資料を製作する役割を担った。第1回大沢みらい集会は2011年10月、大沢まちづくり会議は2012年8月から、仮設住宅の設置されていた小原木中学校体育館で月1回開催された。

図面だけではわかりにくい、高台移転する住宅地や防潮堤などを模型や図版で表現することによって相互の理解を深めたり、ワークショップによって意見の集約を図ったり、専門的な内容については住民に代わって行政との調整を行ったりするなど、住民と行政との間に入り、第三者の立場で円滑な復興事業の推進をサポートできたのではないかと考えている。



小原木中学校での大沢みらい集会の様子

大沢復興ニュース発行

2013年11月から月に一度、大沢地区住民に向けて大沢みらい集会・大沢まちづくり会議の内容をまとめ、「大沢復興ニュース」として全戸に配布してきた。まちづくり会議や行政の説明会に参加できなかった住民にも複雑な復興事業がどのように進められているかをわかりやすく伝え、情報から取り残されたり情報格差によってその後の集会に参加しづらくなったりしないようにすると共に、参加した住民にとっては集会での議論の内容や行政からの諸報告を振り返るために、重要な役割を担っている。

住宅相談会

集団移転をする住宅のモデルプランを作成し、共同で発注することでより合理的かつ安価に住宅再建ができるのではないかと。この考えのもとに2013年8月に共同購入による住宅再建を提案し、以降月1回程度、大沢みらい集会の後に小原木中学校仮設集会所で実施した。ここでは神戸大学と本学に所属する学生と建築の専門家が住宅再建に関する悩み相談や問取りの要望についての聞き取りを行い、個別の図面作成を行うと共にモデルプランによる概算見積もりを行い、その後個別の設計を行った。共同購入の取り組み開始当初は22世帯の希望があったが、最終的な共同購入参加世帯は7世帯となった。スケールメリットと専門家によるアドバイスにより、安心かつ上質な住宅を再建できたが、月1回という住宅相談会開催の頻度と再建スケジュールが後ろ倒しになったことが、参加世帯減少につながったことは反省点として挙げられる。

大沢カフェ（第1期）

大沢カフェは、かつての集落の中心があった場所に計画したコミュニティ施設で、当初は避難所での生活が続く方々の心の拠り所となるように、そしてその後高台移転によりA・Bの2地



大沢復興ニュースの一例（左） 本学科で初期に提案したまちなみ模型（右）





大沢カフェの建設を手伝う大学院生と地元の大工の方々

区に分かれた住宅地と被害を受けなかった在宅の方々を結ぶ新しいコミュニティ醸成の場所として期待された。可能な限りセルフビルドで建設し、作業には主に当時の副手と大学院生が、地元大工の方々の協力を得て関わった。サッシや設備機器など、メーカーから支援をいただき、断熱や気密など省エネルギーに配慮した設計・施工を施した、暖房をしなくても暖かい室内は好評だった。仮設住宅から高台移転をする過程で大沢まちづくり会議（津波被害を受けなかった在宅の住民への利便性を考慮し、集落に近い大沢カフェでも開催した）や大沢カエル教室（後述）をはじめ、津波で失われた地域住民や子供たちの活動の場として利用され、再建後の大沢集落のまとまりをつくる契機となる場であった。

大沢カフェ（第2期）

2017年夏、第1期大沢カフェは防潮堤建設に伴う国道嵩上げのため解体、国道より少し集落側に入ったB地区の麓に第2期大沢カフェを移転新築した。サッシや設備機器、ウッドデッキなど移設可能な資材は引き継ぎ、地域住民の要望に応じて面積を少し拡張した。コスト削減のために壁や天井の塗装、ウッドデッキなどは学生たちによりセルフビルドで施工し、2019年初めに竣工した。敷地内には慰霊碑や祭屋台の収納庫が配置され、第1期大沢カフェで製作したピザ窯やウッドデッキも再建し、スクールバスの発着場ともなっている。地域の催事にも使われ始め、これからの大沢のまちづくりの核となってゆくことを願う。

大沢カエル教室

「大沢にカエル」＝帰還する、そして「大沢をカエル」＝変革するというダブルミーニングを持つ「大沢カエル教室」では、これから新しくより良いまちを作ってゆくためには何が必要か

を考え、そのために集まり、学び、話し合い、そして行動する継続的なワークショップを行ってきた。テーマの柱は

- 地域資源の再発見および利活用（大沢のお魚講座、大沢ムービー製作、出山オリエンテーリングなど）
- 地域の伝統・習慣の継承と発展（屋号キーホルダー作り、竹灯籠作り、しめ縄作りなど）
- 新たな魅力の創出（ピザ窯づくり、OSAWA看板作り、大沢カフェ模擬営業など）

の3つであり、住民同士のコミュニティ醸成はもちろん、住民と外部から来た大沢チームの交流や、津波で失われた子供達の活動の場としても重要な役割を担っている。

2017年3月に最後の住宅再建を終えて集落の高台移転は完了し、期成同盟会は2018年11月に無事解散の運びとなった。集会所の再整備や国道嵩上げに伴う大沢カフェの移転も完了し、ハードウェアの整備は一通り終了した。集落がまとまって再生できたことは、関わった者にとって大きな喜びとなった。

一方で、高台移転によって国道から離れたことや、震災後に集落中心部で営業を始めたコンビニエンスストアの道路嵩上げ工事に伴う閉店による買い物難民問題の顕在化、今後の高齢化に向けた対応など、集落の未来にとって解決すべき課題は多い。2017年度には卒業研究としてライドシェアの社会実験^{*3}を行った学生がおり、継続して見守ってゆきたいと考えている。

2019年6月、国道の嵩上げに伴って移転した第2期大沢カフェにて「大沢メルカート」が初開催された。新装となった大沢カフェに地域の方々が集まり、思い描いていた賑わいが実現したこと、そして何よりも、買い物に訪れた方が「ここにくるとみんなに会えるからいいねえ」と話していたのが印象的であった。この活動は住民による自主的な参加と運営による、コミュニティ醸成とスモールビジネスの場となることを目指しているが、同時にこれまで大沢地区の復興プロジェクトに関わってきた各大学のOB・OGも、それぞれのフィールドで活躍しながらも大沢のことを思い出しながら関わることのできるプラットフォームとなり得るのではないだろうか。今後も、長期的な視点を持って、未来の大沢の姿を共に見続けてゆきたいと願っている。

なお、本原稿の執筆にあたり、気仙沼みらい計画大沢チームで現在製作中の「大沢読本」を参考にさせていただいた。「大沢読本」が完成した際には、こちらも併せてご覧いただければ幸いである。（西澤高男）

*3 ライドシェアの社会実験

2017年度竹内昌義研究室卒業生の高橋奈那による卒業研究「過疎地のコミュニティを支える新しい暮らし方ー宮城県気仙沼市唐桑町大沢地区における民間ライドシェアの実践ー」。

学生インタビュー「大沢に通って考えたこと」

気仙沼みらい計画大沢チームの活動が始まって8年近くが経ちました。以前プロジェクトに関わっていた卒業生と、今関わっている学生たちに、大沢での活動の様子や、活動を通じて考えたことを聞いてみました。(以下、神戸大学…「神戸」、横浜市立大学…「横浜市」、武庫川女子大学…「武庫女」、東北芸術工科大学…「芸工大」、と略称。)

—大沢プロジェクトに参加したきっかけは?

- 小学校の頃、私の住んでいた地域も被災して、復興する経緯を見てきました。それで、他の集落ではどうなっているのか、知りたかったからです。
- 姉が以前、横市で本プロジェクトに携わっていて、私も参加できればと考えていました。進学先をここ芸工大に選んだことの、要因の一つでもあります。

—地域の方々との関係について、教えてください。

- 活動が始まった頃は、遠方にある他大学からの学生が泊まりで来ていたため、地域とのつながりがとても強かったですね。芸工大は日帰りで行くことが多く、最初は少し距離感があったかな。でも、活動が続く中でその距離感も無くなりました。
- いつも仮設住宅の集会所に泊まっていて、コタツを中心にしてみんなで雑魚寝していました。美味しい魚を振舞ってくれたり、夜遅くまで話をしたり。
- 最後の住宅再建が終わって、仮設住宅も2017年3月に解体されてからは、「ベース」(期成同盟会の会長をされていた熊谷さんが所有している空き家)に泊めてもらっています。あの集会所がなくなったのは



大沢地区賀茂神社での例大祭

寂しいけれど、集会所があった頃と同じように過ごしていますね。

—他大学とはどのようにプロジェクトを協働していますか?

- 高台移転に関する活動をしていた頃は、まちづくりに関することを横市、建築などハードウェアに関する部分は神戸、住宅地の区画や緑道、ランドスケープに関することは芸工大で打合せの事前準備をすることが多かったですね。プロジェクトの活動報告をするために毎月発行している広報物「大沢復興ニュース」の作成を武庫女が主に担当していました。大沢カエル教室では各大学が企画を持ち寄り、私たちが担当するときはウッドデッキやプランターづくりなどDIYのワークショップを主に行いました。得意な分野をやるように、自然に役割分担していった感じでしたね。
- 高台移転が完了してからは、(復興補助金が少なくなったことも影響して)神戸や横市の参加は以前より少なくなりましたが、代わりに、神戸を卒業して宮城大学の助教になった友瀨さんの研究室の学生が参加してくれるようになりました。
- 私たちは学科のプロジェクトとして参加していたので、1年生から4年生、院生まで長期にわたって参加した人も多かったのに対して、他大学は研究室に所属してから、あるいは大学院生になってからの参加が多かったので、メンバーの入れ替わりのサイクルが比較的早く、学年的には後輩だけど大沢については先輩、のような関係が生まれることもあり、学年を気にせず親しくさせてもらうこともありました。

—印象深かった出来事を教えてください。

- 集会所、最近では「ベース」で、いつも新鮮な魚やホヤの刺身を振舞ってもらっていました。それがすごくたくさんで、おいしくて。
- 朝、釣りに行っていた人もいましたね。夏祭りと例大祭に参加したのも、良い体験でした。
- 春に地域の方々が開催してくれる「卒業式」は、プロジェクトに参加した1年目か



大沢地区主催の「卒業式」

ら感動しました。それほど頻繁に通っているわけではなく、送り出す各大学の先輩方とも多くの回数会っているわけでもないのだけれど、何しろ行くとも1回1回とても濃密な時間を過ごすので、卒業する頃にはとても仲良くなっているんです。

—今後、どのようにこの活動に関わってきたいですか?

- 集落の高台移転が完了して、去年、期成同盟会も解散しました。これまではその時々によらなければならないことをこなしてきましたが、これから先は、自分たちで「こうだったら良いな」ということを提案しつつ、地域の方々と一緒にまちの将来を考えていきたいなと思います。
- 今度、住民が出店できるマルシェを開催します。OBやOGも関わって、地域ビジネスのようなことができればと考えています。OBやOGがふるさと納税のように出資して、体を使って現地に行ける学生がそれを原資に活動できる、というような枠組みができないかな。
- 私は卒業してからは行けていないのですが、いつも頭の片隅には大沢のことがありました。いつか帰りたい場所、ですね。OBやOGがいつでも帰れるような活動が続けられれば良いですね。

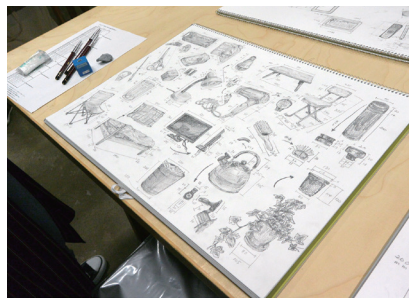
大沢での活動のそれぞれの段階で、学生たちは自分たちで考えて行動する力を身につけていったように見えました。復興支援に行きながら、多くの大切なことを、大沢の皆様から学ばせていただく機会ともなりました。この場を借りて、大沢の皆様に感謝申し上げます。(西澤高男)

1学年 建築・環境基礎演習

1年生が、大学入学後に最初に取り組む課題である。主に描くこと、立体を構成することを行う。対象の基本的な形や質感を描いて捉えることから始め、建築や環境のデザインを考えて行く上で最も身近で基本のスケールである人体の観察を行った。続いて人体と関わる道具や空間、さらに大きな環境へと観察の対象を移し、物や空間の構成、人との関係性、それらを設計・デザインする基本的な考え方を学んだ。具体的には、立体／空間／人体のデッサン、短時間での描写、立体構成を複合的に課した。描くことや造ることの体感を通して人や空間の観察と考察を深めた。描く技術や造る技術は重要だが、それ以上に物事をどのように認識するかが設計・デザインにおいて大事である。各人の成果はポートフォリオにまとめられ、各々気づきをプレゼンテーションしたが、その中に各人の認識の成長が表れていた。(渡部桂)



初めての立体構成を通して空間への認識を深める



身近な道具をとことん測って描く

1学年 インテリア基礎演習

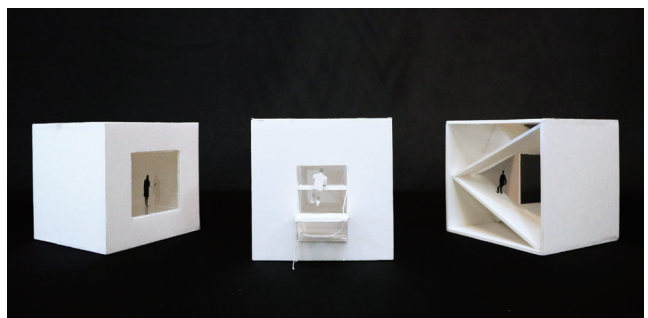
1年生で、最初に空間を扱う演習である。抽象的な空間と向き合うことにより、建築の空間のつくり方を、模型製作と併せて手を動かしながら熟考することを目的としている。

まず、サイズとして取り扱いのしやすい2.7m立方の「茶室」をつくることから始め、その立方体の空間にシンプルな空間操作を施すことによる展開、そして5.4m立方の空間とその分割へと、スケールを拡大しつつより抽象性の高い課題へと推移してゆく。その過程で、人の入る空間のスケール感を習得し、作り上げた具体的な空間から抽象性を獲得することに加え、空間の分節や動線の挿入を行うといった様々な建築的な操作に慣れてゆくことを目指している。

3回ある課題の講評会には、山形・仙台で活躍する、本学卒業生を含む若手建築家がゲスト講師として参加し、共に講評を行なった。これは建築の回答は一つではなく、様々な見方が存在して良いということを大学生になりたての学生たちに伝えるためであり、今後より密度の高い内容に取り組んでゆく際に大事なことでもある。また、複数回の模型製作を通じて繰り返し「手で考えた」経験も、今後の糧となるであろう。(西澤高男)



まずは2.7立方のシンプルで抽象的な空間操作を行う



5.4立方にスケールアップし建築的な操作に慣れる

1学年 建築・環境施工演習

身近な自然に触れながら、人と空間・環境の関係を考えた構造物を実際に施工する演習である。素材とそれを生み出す自然、ものを組み立てる時の構造的な力や空間の性質を体感的・経験的に理解する。今年度は、大学本館裏手の悠創の丘（都市公園）の一角とその背後の杉林を現場とした。ここは前回実習から2年が経過した場所で、樹木は生長を重ね下草が生い茂り、自然に戻る力が働いていた。まずは草を刈って土地の地型を浮かび上がらせた。改めて人間が入り込む公園空間として下枝を上げて見通しを確保し、支障木を伐採して空間の整理を行った。その上で杉林の間伐や現地で発生した木材を用い、人が空間を利用することを想定した柵や階段、腰かけなどを整備した。各グループ空間の性質を読み込み、場に相応しい整備を行うことができた。また、その作業の記録をまとめ、環境情報、作業手順、道具の使い方、空間の性質の読み込みや操作による変化、寸法の感覚など、それぞれに気づきや今後の設計・デザインで役立つ情報をまとめることができた。（渡部桂）



自ら調達したスギ間伐材で小階段をつくる



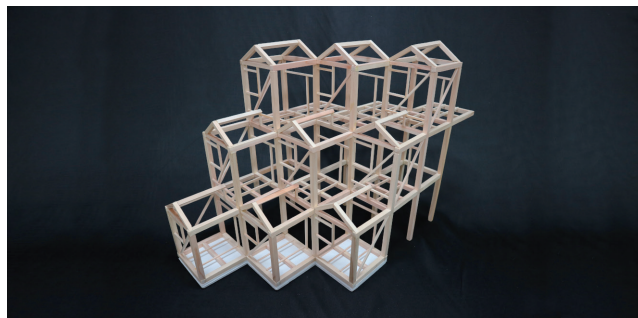
スギの支柱と広葉樹の枝で粗朶柵をつくる

2学年 木造建築演習 タイニーハウスの設計

この課題では、木造建築の基本となる軸組構法による建築について学ぶ。木をどのように組み合わせて空間をつくるのか、さらに図面の意味を理解するために木軸模型をつくりあげてゆく。設計のテーマは、床面積 7.3m^2 （四畳半）で構成される「タイニーハウス」で、敷地は学内の平坦な場所を各自が探して決める。ミニマムなスペースでありながら、各自が設定した「何か」をするための空間とはどのようなものなのか、空間と機能を結びつけ、さらに空間のヴォリュームを的確に把握して、外から聞こえてくる音、流れる空気、それを包み込む素材や構造などを総合的に考えてゆく。長利咲代子の作品は、敷地周辺の地形や吹き込む風や木々の様子を丁寧に読み込むことから始めている。そこから得られた情報を元にスタディを進めて「1/fゆらぎ」を見出し、それを形に落とし込み、内部へのアクセスや空間の広がり表現した点が高く評価された。佐藤佳夏作品は、与えられた床面積を9つに等分割して、「こもる」ための小さな空間を立体的に展開している。造形的にも面白さが明快に表現されている点が高く評価された。（山畑信博）



最優秀賞 長利咲代子



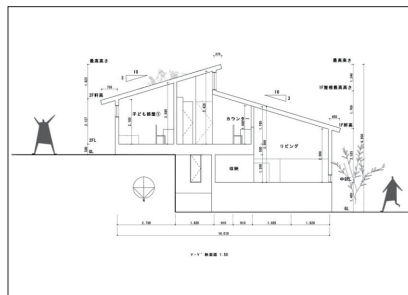
最優秀賞 佐藤佳夏

2学年 住宅と外構の設計

設計の初心者は、間取りなどの内部に気をとられ、建物が敷地に対してどのように建てられるかということをお忘れがちだ。建築はこう建てたいという内的な構成だけではなく、外部の環境にどう建てられるか、環境からどう影響を受けるかを常に考え続けなくてはならない。

2年生後期の住宅の課題である。敷地は大学の近くの住宅地。あるエリアを10等分して、それぞれの外的条件を取り入れつつ、設計を進めてもらった。敷地の条件は場所によって違うので、対応にバリエーションが生まれる。お互いの他の学生作品を見ることで、環境への対応の違いも学ぶことができる。家族のあり方などを設計のきっかけにしながら、それぞれの学生が様々な住宅を設計した。

長利咲代子の最優秀案は、周辺の敷地に高さを合わせ、それと内部の高さ関係をすり合わせながら場を作る、秀逸な操作が行われていた。(竹内昌義)



最優秀賞 長利咲代子

2学年 フィールドワーク入門

建築・環境を学ぶ上で、現地調査から情報を集め、記録し、その成果を第三者にもわかりやすい形にまとめる「フィールドワーク」はその基本かつ大切な作業である。この演習では2年生を対象に、前半は本学東側に建つ本学所有の農家と納屋の建築をグループで実測、作図、後半は、同じく農家の背後に広がる字上桜田から岩波地区に位置する農地の利用状況をグループ別に観察、記録し、同時に実施した担当教員による農家建築、農村地区のエクスカージョン（解説付き見学）の体験結果の報告を加えて、A4版の報告書形式でまとめ上げていく。歴史的建築や実際の耕作地というリアルなフィールドが本学敷地周辺に存在し、その環境に直に触れ、体感しながらその実態を理解し、分析していく、本学ならではの環境特性を活かした演習である。周辺農地の実態調査は、毎年継続的に実施しており、本学周辺では、年々休耕地、耕作放棄地へ転化される事例が増えている現状が読み取れた。なお、農家建築は、明治期に竣工した座敷部分と昭和40年代に増築された生活部分、大正期にできた納屋からなる本学所有の建物であるが、年度内に取り壊しの計画があるため、ここでの演習は最後となる。(志村直愛)



農村での実測とエクスカージョンの風景

課題 1

ある対象から喚起されるイメージ。小説や音楽、映画やアート。自らの五感で感じ取り、対象から発せられる思いやイメージを具象化する作業。

小野晃未と菅原茉莉の作品は、対象物への思いが対照的な作品である。

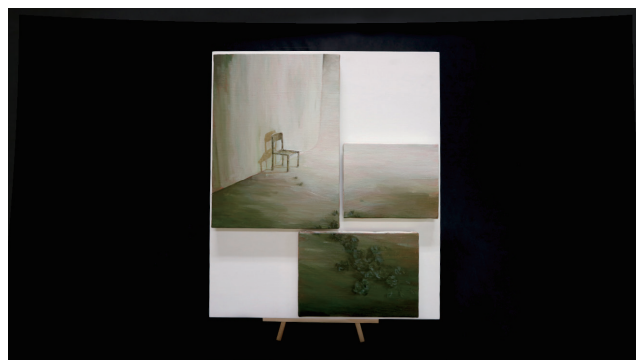
最優秀賞の小野の作品は、映画「アメリ」から浮き出された感情や思いを全く別手法にて作製した連作である。

「静」と「動」を対比させることで、映画の中にある主人公の「心情の変化」と「成長」を巧みな技術とコンセプチュアルに手作り感溢れるアナログ的手法を駆使し、二つでひとつの作品として見事に自己の思いを表出させている。

一方、菅原の作品は、より建築空間的な表現に徹している。物語の主題でもある「虚空」を画中空間の「見切り」を無くすることで、永遠性を具象化しようとした試みである。繊細なタッチや淡い混色の色使いによるグラデーションで、物語の主人公の心のうつろいや虚しさを豊かに表現している。(八重樫直人)



最優秀賞 小野晃未



優秀賞 菅原茉莉

課題 2

近代及び現代建築からインスパイアされる具体的なイメージ表現への試み。建築家の思いやコンセプトに刺激される、或いは共感する事で生まれる再解釈による造形。またより立ち現れた形や姿に影響されその再解釈、特化した再構築作業に徹する造形作業。

ここに上げる二つの作品は、その両極にある秀作と言えよう。

佐藤佳夏の作品は、建築家：石上純也の言葉からの再解釈により作り上げた作品である。重力からの開放、自然への憧憬を色彩と形を「吊る」という動的手法で表現した。「柱」の浮遊感を実感できる作品であると共に、オブジェとしての美しさも表現することが出来る。

新関千広の作品は、シドニーにあるヨン・ウツオンデザインの「オペラハウス」の形とディテールに感化されたオブジェである。建築に内在する「部分」と「全体」というテーマに果敢に挑み、紙一枚の「折」という作業から生まれる造形美を前面に打ち出した素直で、清々しい作品である。(八重樫直人)



優秀賞 佐藤佳夏



優秀賞 新関千広

エコハウスの設計は、本学科の特徴の一つである。現在、建築、特に住宅の分野では、高断熱高气密の快適な住宅が求められ普及しつつあるが、これを積極的に教えている大学の数は少ない。本学科では、これまで学科として取り組み、山形エコハウスの建設など行ってきたノウハウを、3年生の演習にしてフィードバックしている。

敷地は道路の両側、南側と北側にある2つの敷地に2つの住宅を建てるというものである。道路の取り付け方によって、日射取得が大きく変わるため、この2つの違いとバリエーションを学んでもらおうというものだ。学生は設計を進めた段階でQPEXにより温熱計算を行い、そのフィードバックを取り入れることを目的としている。

エコハウスの設計で最も重要なのは、日射取得である。それは敷地のかたち、建物の建て方、開口部の大きさ、プランによって大きく変わる。それらをいかにうまく使えるか、建築設計の腕が問われている。また、エコハウスは感覚的なものではなく、きちんとした計算に基づくものであるということを理解してもらいたい。従って、温熱計算をしてもらう。現実では、断熱材の量の多寡はコストに影響され、なかなか自由にならないが、演習では自由に設定できるので、そのシミュレーションもできる。ここで、良質な3組の住宅群を優秀作とした。

小野寺葉月の案は、オーソドックスな片流れでありながら、プランがよく考えられた案である。南北の違いも含め、日射の取り方も良好だ。漆山里沙の案は、シンプルなボリュームで、南北の共用スペースを囲んだ案である。モダンな印象のある作品だ。佐藤朋子の案は、取り外しができるパーツを使いながら、日射コントロールをするという提案である。この課題の趣旨をよく理解し、意欲的な提案になっていたと思う。

2年生での住宅の課題は、どのように住むかという住まい方のあり方に注目しながら、コンセプトのあり方、住宅の表現の方法などが求められているが、このエコハウスはすぐにでも建てられるようなレベルの住宅を要求される。3年生はどの課題も大いなる成長を促すものにしていきたい。(竹内昌義)



優秀賞 小野寺葉月



優秀賞 漆山里沙



優秀賞 佐藤朋子



最優秀賞 野村芹果

集合住宅にまつわる法規制とそれを解決するデザインについて、基本的法令の確認及び、デザイン事例リサーチを経て設計に展開させた。「二方向避難」など学生の課題ではあまり議論されない用語に戸惑いも見えたが、最終的には集まって住むことの豊かさまで視野を広げた作品に仕上げる学生もいた。野村案は集合住宅の採光確保に目を向け、住戸の突起が扇状に広がる各階をずらして積層する構成。採光確保と同時に空間のダイナミックな豊かさを生むシステムを考えた良案である。(蟻塚学)

3学年 リノベーション演習

山形駅にほど近いずらん通り商店街。ここは約60年前、東北で初の防火建築帯として整備された特徴的な建築群である。道路の両側に約200メートルにわたってRC造3階建てが連なり独特な風景を形成している。しかし現在、その約30%が空き家になっており、ここではそのリノベーションを課題とした。

菅井滉生の作品では、対象となる部屋を複数の小さな事業者が共有するシェアショップが提案されている。さらにその場所を拠点に、ストリートを歩行者天国にし、日常的にマルシェなどが行われるような仕掛けを構想している。点の変化が面的に展開していくエリアリノベーションの可能性を表現しようとしたものだ。

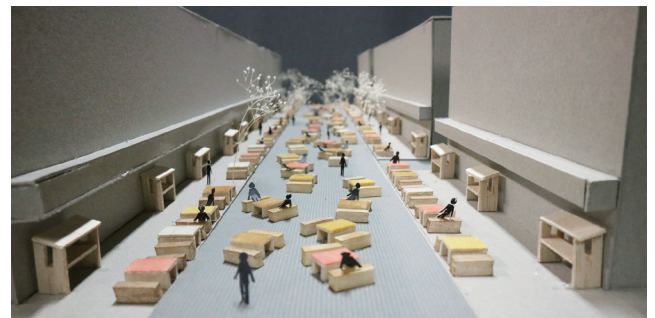
ネット通販や郊外的大型店舗で商品が均質化するなか、街中に求められる小さくとも顔のある個人商店。この作品はその時代のニーズをつかんでいると共に、古い商店街が新たなコンテンツによって生まれ変わるストーリーが描かれている。

(馬場正尊)



最優秀賞 若月優弥

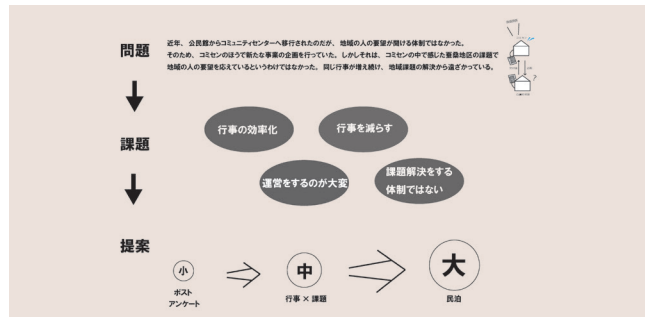
市内山形駅周辺、香澄町一帯を対象地として、都市部市街地の土地条件を自然、空間、生活、歴史の軸から読み解き、綿密な現地踏査と地図資料分析からその魅力、問題点から課題を抽出し、土地のポテンシャルを高めるまちづくりの提案を導くものである。若月案は、駅周辺に数多く分布する駐車場をその種別、形態、使われ方、管理会社などから徹底的に分類分析し、地域に利益を落とし、まちづくりのために活かせる魅力ある空間にするための仕組みを提案した秀作である。(志村直愛)



最優秀賞 菅井滉生

3 学年 農村計画

農山村のまちづくりを環境と住民という視点で学ぶ演習としてはじめて2年目になる。昨年より対象としたのは人口約3千人の白鷹町蚕桑地区の中からさらにエリアを絞込んだ横田尻区、人口1,050人である。最初に地域の人口、土地利用、農業などの産業といった要素を統計資料や地図から水と農地や森林の環境的な特性を読み取ることから始め、次に現地に行って地域の関係者にヒアリングを行うという手順を進めた。その結果、この地域では農業の法人化が進んでいて、大豆などへの転作が進んでいることなどが分かった。そして、近年公民館がコミュニティセンターへ移行し、これまでの社会人向け学習事業に加え、防災や福祉、地域課題解決、地域活性化に取り組める総合的な地域づくりの拠点として位置付けられたが、会田朋史はこのコミュニティセンターの運営に着目した提案を行った。最後には住民に集まってもらって発表会も行い、住民との活発な意見交換ができた。地域自治の必要性とコミュニティセンターの役割が高まる中、それを大学が支援することにつながればと願うところである。(三浦秀一)



最優秀賞 会田朋史

3 学年 小学校の設計



優秀賞 松川遥菜

山形市立第四小学校の建て替を想定した小学校の課題である。学びの空間はその学習方法の変化に伴い、様々な提案がなされている。普通教室と特別教室群、体育館がある。運動場には銀杏のシンボルツリーがあり、南面からの日射取得が良いことが求められるため、運動場の配置がポイントとなる。松川案は、おおらかに銀杏の木を包み込み、柔らかな曲線をまとい、その曲線に沿うように屋上までのスロープが配置されている。内部は緩やかに繋がっている空間となっていた。(竹内昌義)

3 学年 地方都市のまちなかに建つ複合施設



最優秀賞 桑原和則

大型商業施設の閉店によって長いこと遊休地となっている山形駅前敷地の、まちの未来をつくる商業、公共、オフィスや居住、滞在の機能を複合させた建築を計画する課題。最大容積の確保とは違った価値観の表出を求めた。桑原和則の案は、ものづくりとその紹介のための場所を核とした施設。駅前広場から裏の路地へ続く導線を意識した平面計画や組子をモチーフとしたファサードなどが詳細に検討され、完成度の高い提案となった。(西澤高男)

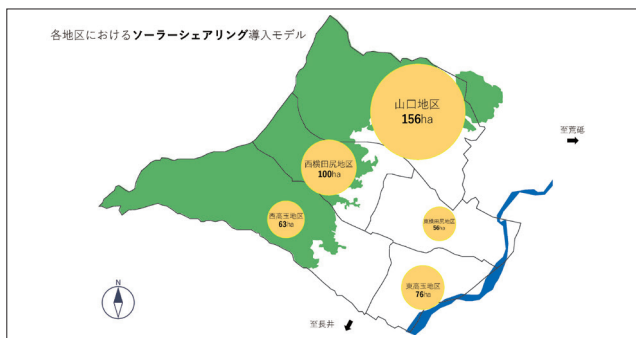
3学年 まちの公共空間となる図書館

この課題では、図書館をベースにした複合施設を、再開発の進む山形駅西口に設計する。昨今、図書館はただ単に知の集積の場としてではなく、生涯学習や地域の情報拠点としての役割を果たすようになってきている。さらに紙媒体に依らないメディアの発達や民間委託の是非など、図書館を取り巻く状況は激しく動いている。ここでは、本（情報・知識）をきっかけとした新たなコミュニティを創造し、「サードプレイス」となりうる豊かで居心地の良い空間の提案を目指す。学生たちは、まず与えられた敷地周辺の状況調査を行い、そこから何が必要とされているか、何を加えたらおもしろいのかを考えた。地場産商品の製作・展示販売、足湯、ギャラリー、音楽スタジオ、カフェ、ワークショップスペース、公園や森林、憩いの場、放課後のたまり場など、様々な提案が見られた。大宮拓真の作品は、山形の情報の集積の場として、県内・県外の人たちに提供するワンストップ的な場として山形の魅力を伝える待合場所の創造であった。オーソドックスな配置・平面ではあるが、情報の集積を、吹き抜けを介して視覚的にも楽しめる場を提案したもので、図面や模型の完成度も含めて高い評価を得た。（山畑信博）



最優秀賞 大宮拓真

3学年 まちの自然エネルギー計画



最優秀賞 迎田峻真

この演習は農村計画の続編として、同じ白鷹町蚕桑地区を対象に、自然エネルギーに着目したまちづくりの提案を行う課題である。特にこの場所は財産区という共有林の形態が今も残る地区であり、その森林の利活用を検討する住民の意見を聞く機会も設けられた。また、かつて冬に木を伐採して橿で運んだという経験者の話も聞いた。こうした話をもとに、迎田峻真はこの地区の森林資源を薪として活用し、地域のエネルギー自立ができることや経済的な効果を分析して提案を行った。（三浦秀一）

3学年 劇場とシネマ通りの再生



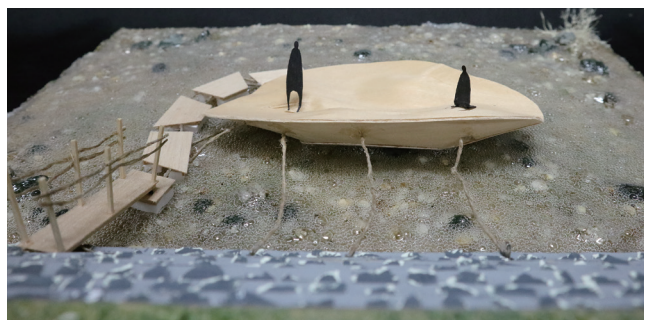
優秀賞 佐藤朋子

かつて山形を代表する映画館だった「シネマアサヒ」の跡地を、再び文化の中心となる劇場として再生し、その建物が周辺環境、そして山形全体に与える影響等も含め設計することを課題とした。佐藤朋子の作品は、CLTと呼ばれる新たな木造パネルを利用した移動型の劇場である。まるで遊園地のような楽しそうな空間と、環境やリサイクルにも配慮した建築システムを両立した先進的な提案がなされており、都市の中に出現した木の空間に人々が楽しく集うイメージを喚起させている。（馬場正尊）

建築とランドスケープデザインの分野を統合した演習を行おうと考えた。敷地は山形市を流れる馬見ヶ崎川とした。河川は人間にオープンスペースだけでなく流域の物質循環に基づく種々の生態系サービスをもたらし、他方で洪水などの災害を起こす。学生は、その理解の努力の上に人間と水域の関わりを様々に模索した。提案は、ヒューマンスケールの装置に関したものが多数を占めた。野村芹果は、川面の上でくつろぐハンモックのような装置を提案し、佐々木依美は川に浮かぶ小舟を瞑想の空間とした。いずれも人間の自然への介入を最小限に抑えることを基本としていて、それは肯定できる。しかし、私たちが一般に使う建築空間はより大きく、自然に与える影響も大で、本質的には人間と自然の折り合いをどう持続的につけるかが問われる。そのためには、人間と自然の相互の物理的な接触のあり方を考える他に、人間の印象形成にはたらきかけることからランドスケープそのものへの介入まで、多様なアプローチを図ることが重要と考える。今回の作品群には、その多様性が不足していた。今後の課題でも、ランドスケープ理解の重要性への意識を喚起していきたい。(廣瀬俊介・竹内昌義)



最優秀賞 野村芹果



最優秀賞 佐々木依美

3学年 ランドスケープ総合デザイン

建築やまち、人々の暮らし、自然環境を一体に捉え、それらの関係性を読み解きながら一つのランドスケープ(土地、風景)として総合的にデザインする演習である。対象地域は山形市東部の平清水(集落)で、古くから陶芸の里として知られる。現地踏査、文献調査、インタビューなどから地域の魅力や課題を抽出し、それらを根拠に集落の未来の暮らしや風景をデザインした。会田朋史は、平清水は集落周辺にある天然資源(木材、石材)を暮らしや空間に合わせて利用しており、その活用技術や知恵が美しい風景を作っていると読み解いた。集落のより多くの人がこの資源の存在と利用に気づくことが、さらなる資源と住人(自然と人間)の関係を深め、自ずと平清水らしい空間と風景になるであろうと構想・計画した。キーワードは「集める・分ける・まとめる」である。暮らしに利用可能な資源を多くの人が見える場所に丁寧に美しく分けて集積させることで風景を作り出す。見せるように集積された資源は必要な人が利用し、余剰があればまたそこに積み、誰かの利用に回される。流動する資源を空間づくりの主役に据えた視点やそれが場の特色であるとする分析力が優れていた。(渡部桂)

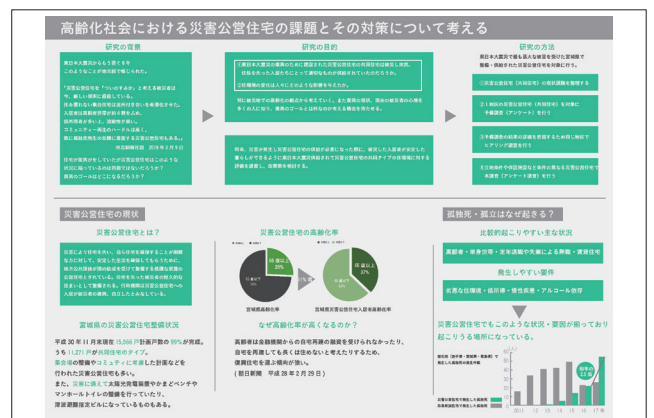


最優秀賞 会田朋史



東日本大震災から約8年経ち、宮城県の災害公営住宅は整備完了した。災害公営住宅の住民の高齢化率の高さ、住み慣れない集合住宅はコミュニティ再生のハードルが高く、すでに孤独死の危機に直面する災害公営住宅もある。この研究では、宮城県の災害公営住宅を対象に、災害公営住宅は被災地にとって適切なものであったのかを調査し、現在の課題を見出す。研究ではアンケートとヒアリング調査をおこなった。この研究を通して、復興はコミュニティに配慮した計画された場所へ住むよりも共に災害公営住宅を作り上げた方が良好であった。とくに、集団移転した地域は既存のコミュニティがあるので住民間の交流が活発であった。コミュニティに配慮した計画は思っていたよりも効果を得ることができなかった。それは災害により住民は単に家を失ったのではなく生活の積み重ねたものを失ったからであると推測できる。再びコミュニティ再構築や新しい地域への愛着には、共に計画に携わることにより住民がまた生活を積み重ねることが重要になる。また、災害公営住宅に対する不満も少なからずあった。積層型の集合住宅は今まで戸建て住宅に住んでいた人にとっては慣れないものである。そして実家のような機能面が喪失されていることも挙げられる。新仏具の設置や年中行事を行うこと、部屋を自由にカスタマイズできないことなどだ。

高齢者は住環境の変化に対応することが難しい。実家のような機能があることは住環境の変化を減少させると同時に、自ら生活を整える重要な機会になる。(茄子川彩佳)



SNSをモチーフにし、より身近な問題として喚起した

講評

本研究は、東日本大震災の被災地に整備された災害公営住宅について、住民のアンケート調査から現状の問題と将来に向けた課題を明らかにしたものである。

約250名のアンケート調査から明らかになったことは、「鉄の扉」で区切られた住居形態が孤立化を助長し、住民同志の交流を制約しているという事実である。震災から8年が経過し復興のためのハード整備が完了しつつある現在、表面化し難い住民の生活面や精神面の問題に着目したことは、時宜を得た有意義なテーマと言えよう。この研究にまとめられた住民の声は、引き続き内面的な復興が必要であることを強く訴えかけてくる。(吉田朗)



一人暮らしをする学生の部屋の使い方

— 個人の秩序から考える学生寮の設計 — 久湊美弥

学生が集まって住むことで生まれる風景はどんなだろう。私は現在の一人暮らしをする大学生の賃貸アパートに2つ課題があると感じている。1つ目は、大学周辺の賃貸アパートは毎年学生の入れ替わりがあるため、地域住民との交流が疎遠であり、学生自身も自分のまちであるという意識が低いこと。2つ目はあらゆる専門分野を学ぶ今の学生のライフスタイルに部屋の間取りが適していないと感じることである。解決方法としては、学生と地域住民の暮らしに距離をつくり、生活習慣（時間）は類似しつつも、専門分野の異なるプライベートな部分を刺激しあえるもの同士が集える場所、「学生集落」だと考えた。どんな学生が暮らしているのか、そんな不安を抱かせることのないよう、地域住民も利用できる公共施設や部屋の一部をギャラリーとして「ひらく」工夫をすることによって学生と地域住民の程よい距離感を保ち、学生の日常生活自体が町に対する主体性に繋がるのではないだろうか。（久湊美弥）

講評

久湊美弥の作品は、前期に行った学生アパートの調査の延長線上に位置付けられる。学生はライフスタイルに合わせて、持ち物と空間をどう構成するか、傾向を再発見し、4つのパターンで類型化した。それらの研究を生かし、大学のある上桜田に学生寮のまちをつかった。建物は小さな切妻屋根の連続で、集落的な様相をつくり上げている。まちの人や学生が使う共用の建物も加わり、独特なコミュニティを形成した。この作品は形もさることながら、ある独創的な雰囲気醸し出している。（竹内昌義）



「逃げる」の空間

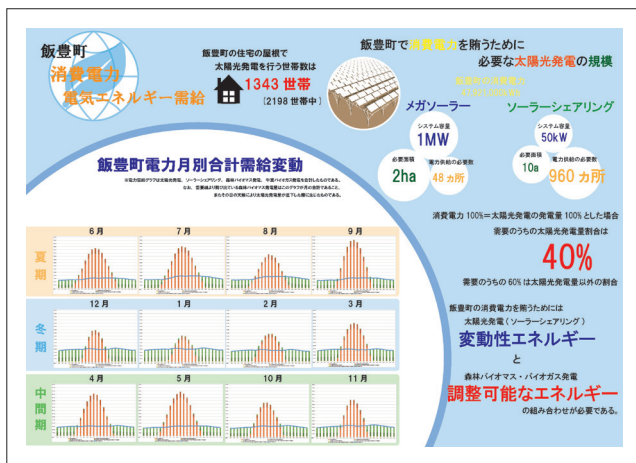
— 現代社会における精神的な逃避に対する空間分析 — 渡部理子

「逃げちゃダメ」。辛いことがあっても、苦しいことがあっても頑張って立ち向かうことが昔から美德とされている日本。私はこの風潮に疑問を抱いた。確かに逃げずに立ち向かうことは立派である。しかしこの風潮にどれだけの人々が苦しめられたのであろうか。また、現代社会は様々な情報で溢れかえり、SNSやインターネットで本来は知らなくてもいい情報、信憑性のない情報に人々は心を荒立て翻弄されているように感じた。このような社会で建築は何が出来るのか。根本的な解決は出来ないかも知れないが、逃げて良い「場」があるだけでも、逃げたい、逃げたいけど逃げてはいけないと日々追い込まれている人々の心情を肯定し、支えてあげられると感じた。

生まれ変わりの意味を持つ出羽三山の巡礼。その出羽三山農地の一つである羽黒山に、現代社会から逃げながら、自分を見つめ、逃げたいという感情を解放し日常へと戻る後押しとなるような、逃げるためだけの建築を提案する。（渡部理子）

講評

渡部理子の作品は、「逃げる」をテーマにした、山形出羽三山の一つである羽黒山山頂付近に連続する建築である。そこを訪れた人は参道を歩きながら空間を体験する。周囲の杉の高さに合わせた木造の構築物は三角形で構成され、その中で様々な場所を作る案であった。そのものの長さ、高さ、模型の迫力など、見るものの心を揺さぶる作品である。最初にあった「逃げる」は、現代社会の様々なストレス、社会の基盤からの逸脱、物理的な逃走、いろいろなレベルの「逃げる」を想起させる。それを切り取って示した腕力は大きなものだ。テーマはほぼぶれずに初志貫徹している。（竹内昌義）



飯豊町における農地を活用した地産地消の再生可能エネルギー
遠藤龍太郎

近年、エコロジカルという概念が重視されている中でも、エコタウンなどの地方都市を中心とした再生可能事業が注目を集めている。再生可能なエネルギーの例として挙げられるのは、太陽光発電、風力発電、小水力発電、バイオマス発電（木質・メタン）である。そこで私は飯豊町の空いた土地に注目し、飯豊町のエネルギーを自給自足出来ないかと考え、研究を行った。その結果飯豊町では、太陽光発電、バイオマス発電（木質・メタン）を利用したエネルギー生産が有効であるという結論に達した。言い換えると、飯豊の活用されなくなった土地を有効活用し、エネルギーを生み出すことが大切だということだ。今後エネルギーの生産方法で最も大切なのは、今ある地域の特徴を尊重しつつ、資源を最大限に利用してエネルギーを生み出すこと。このことを考えていくことで、地域のエネルギー自給率が100%に近づくだけでなく、そこに住む人の心も生活もその地域自体も豊かになっていくと考える。（遠藤龍太郎）

講評

近年、自然エネルギーに対する期待は大きく高まっており、100%自然エネルギーを目指す動きも出ているところである。遠藤龍太郎の地元飯豊町は森林資源を活用した自然エネルギーに熱心に取り組んできた町である。この飯豊町の資源や土地を使って自然エネルギー100%が実現できるかを分析した。太陽光発電のように昼は発電しても夜は発電しないというような供給側の時刻変動と、エネルギーを使う側の時刻変動をマッチングできるかということ膨大なデータを用いて検証したという意味で先端的な研究であると言える。（三浦秀一）

日本橋・首都高速道路再編化計画
—まちと呼応する庁舎建築— 中川広海

江戸時代から五街道の起点だった東京・日本橋。その上空に架かる首都高速道路（竹橋JCT-江戸橋JCT間）を地下に移設し水辺を取り戻す構想が動き出した。だが、首都高速道路は高度経済成長期から今日まで日本の成長を支え続けた功労者の1人である。そんな首都高を日本橋の景観にそぐわない「負の遺産」として撤去することが日本橋の景観を取り戻すことにならないと考えた。日本橋周辺は、ビルが乱立した風景が広がっている。今まで騒音を響かせて来たことによって都市の裏側とされてきた。首都高は、ビルが乱立した都市の中の新たな大きな空地として定義する。今までは車で通り過ぎることしかできなく、人が自分の足で踏み入ることもできなかった首都高は、様々な世代が豊かなハーモニーを奏で、まちと呼応する公園の中に点在する庁舎へ再編化する。首都高は戦後のレガシーから再編化することで日本橋の新たな歴史の一部として積層し新たなレガシーとして、人とまちを繋ぐ架け橋となる。（中川広海）

講評

首都高速道路の移設が検討されている東京・日本橋周辺。中川広海は、幾重にも積み上げられてきた歴史を否定し廃インフラを撤去してしまうのではなく、それらを活用・再生させ、より良い環境をつくり出すことを試みた。機能を失った高速道路に、視線の抜けを意識した隔壁と緑化による公園のような線状公共施設群を設えることで周囲の建築物や道、川、そしてコミュニティを相互に繋ぐ媒体としての使命を与え、生活に根ざす新たなまちの構造を産み出した。高速道路移設自体の賛否など議論は尽きないが、難しい課題に果敢に挑んだ意欲作である。（西澤高男）



初の試みとなった卒業・修了展初日の公開審査（左上）
 卒業・修了展に来た高校生へ作品をプレゼンテーション（左下）
 保護者の方へ心を込めて四年間の集大成を説明（右上）
 卒業・修了展「図と地」展示の様子（右下）

本年の卒業設計から、公開審査を行うこととした。卒業論文、卒業設計を年末の発表会の時点で10作品選び、公開審査の場で5つの賞を決めた。これはどういったプロセスで賞が決められるのか、学生に見てもらいたかったからである。

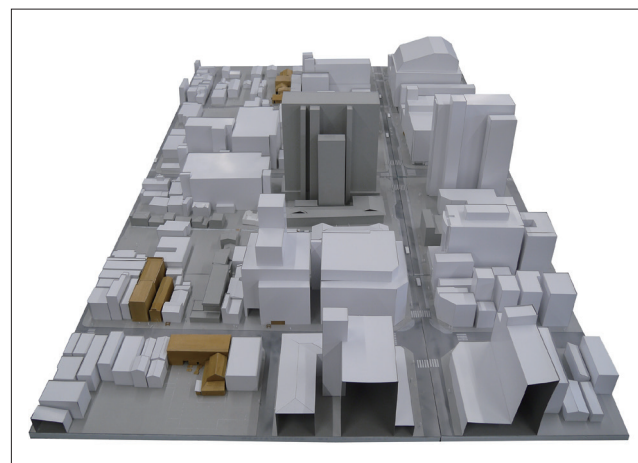
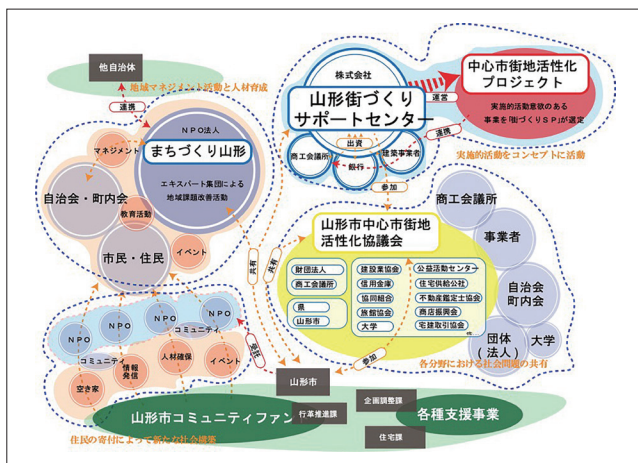
社会では、時にシビアに、あることが評価される。その仕組みはある公平性や客観性があり、あるプロセスで行われる。作品であれ、論文であれ、1年間を通して学生が獲得、表現したことは、個人にとって尊いものだと思う。一方、それらを並べて、評価し直すことにも意味があると考えたからだ。

学生からは、同じ組上に乗りにくいからという理由で作品と論文で評価を分けるべきではないかという意見も聞かれた。確かに表現の方法が違う。しかし、大学4年生がその1年で何を発見しようとして、発見できたか。何を表現しようとして表現できたか。それらの社会の中での批評性、あるいはインパクト、意味はどんなものか。それが大いに議論されることは意味があったように思う。

さて、今年の最優秀賞には茄子川彩佳の論文、「高齢化社会

における災害公営住宅の課題とその対策について考える」を選んだ。災害公営住宅のコミュニティに関する聞き込み調査を基にしたものだが、良好なコミュニティが形成されているのは、建築的な工夫ではなく、継続的なコミュニティのあり方によるという結論であった。考えてみれば、当たり前の結論であるが、建築の空間のあり方を考える私たちにとって、かなりのインパクトがあった。これは復興に携わりながら常に感じることであるが、そこでのコミュニティがうまくいっていなければ、いくら形が整ったとしても意味がないということになる。建築の計画学的な静的な手法ではなく、時間やコミュニティを含めたプロセスと、その結果としてのあり方が求められているのだということを改めて認識した。

今年の作品、論文共に力作が多かったように思う。中川広海案の首都高に対する提案、また、遠藤龍太郎案の様々な切り口での環境的な論文。時代の中での「眼差し」を感じるものが多かったことを付記しておく。(竹内昌義)



空き家に関する研究 —山形県東村山郡山辺町を事例に— 佐藤亨樹 講評

我が国では、少子高齢化と若者の都市部への移動などに伴う空き家の増大が社会問題となって久しい。相続された土地や建物が登記されることなく、年月を経て所有者が行方不明になる、あるいは相続人が多すぎて合意形成に至ることが困難になるなど、空き家がそのまま放置される実情に対して国や自治体の政策も追いついていない。空き家対策として、都会からの移住者に期待する旨もあるが、積雪地では冬期の生活、特に除雪作業の困難さなどにより移住地として選定されることは少ない。このような数々の問題を抱えている空き家に対して、本研究は全国各地の事例調査を踏まえて、山形県山辺町を対象に、その実態を明らかにして対策を提案したものである。まずは全国の空き家対策の成功モデルを調査し、それが山辺町に適用できるか否かの検証を行い、山辺町固有の課題を見つけ出す作業に入っている。山辺町を中心部、郊外部、山間部に分けて調査を行い、住民の生々しい実態とその思いを記録することができた。山辺町は県都である山形市に隣接しているため、中心部からは、山形市への通勤・通学圏となっている。それに関わらず、空き家の数は少なくなく、また将来空き家となることが想定される住宅を、ヒアリング調査から明らかにすることができた。また、冬期の除雪や医療機関への交通の便が特に不便である山間部においても、ヒアリング調査から隣人・コミュニティの問題、祖先から引き継いだ土地への執着、親戚・家族関係など、住民たちの思いの本質に迫る声を引き出すことができた。これにより、山辺町の30年後の姿が浮き彫りになり、10年後、30年後を見据えた、町内移住モデルを構築し提案に至っている。そこでは単に集団移転を強要するのではなく、自治体のインフラ維持に係るコスト削減も視野に入れており、より説得力のある提案となっている点も評価される労作である。(山畑信博)

地方都市の再開発とエリアリノベーション —山形市七日町中心市街地を対象として— 塩真一成 講評

山形市七日町周辺を対象にしたエリアリノベーションの実践的な研究である。空き家の再生などが起こるなか、同時に再開発の計画なども進み、街は現在、変化のきっかけをつかんでいるタイミングにある。そのような状況で、個人レベルでも可能な都市に対する働きかけがどのような実効性を持つのかの実験が行われた。この研究はまず、都市のツボのような場所を発見することから始まっている。例えばそれは表通りと空地をつなぐ裏路地だったり、御殿堰に誰かがかけた小さな橋だったり、再開発によって生まれた変形の余った土地だったり。日常に埋没して見逃されそうな空間だが、そこにデザインとアクティビティが加えられることにより、まるで滞っていた血液が循環するように、新たな人の流れが起こり、街の活性に寄与し始める。具体的な成果として、小さな屋台やデッキなど、人が関わる手がかりをつくれれば、その場所は空間と人間をつなぐ結点となった。細い路地でマルシェを開いてみると、眠っていた時間と空間がにわかにか動き出し、街の変化のきっかけとなった。そのどれも小さいが、ツボを刺激するように街の人々の意識や風景に影響を与えることを実感することができた。近代の都市計画により基本的な骨格を与えられたが、人口減少と産業構造の変化に伴い、それは機能不全に陥っている。私たちはあらゆる手段を講じてそれに対応しようとしているが、この研究もその試行錯誤の一つであり、部分の変化をいかに全体に還元できるかの試みである。(馬場正尊)



前明石エコタウンプロジェクト

エコハウスが普及していくためには、価格がある程度抑えられ、デザインがよく住みやすいことが求められる。そしてそれが特別なものではなく、日常的なものにならなければならない。

山形市のデベロッパーである株式会社荒正は、19件の分譲住宅を作るにあたって、大学が研究してきたエコハウスのノウハウを使い、全ての住宅がG2^{*1}レベルの性能を持つエコタウンをつくることとした。まちの魅力を増すためには、それを取り囲むランドスケープが重要だ。緑道を持つ散歩道のデザインは、本学科の渡部桂准教授に依頼。エコハウスにありがちな閉じた印象をさげ、より外部と内部を一体化するために「野遊び」をテーマにしているアウトドアメーカーのスノーピークと協働し、企画と空間を練っていった。

大学では設計、学生は模型作りなどを担当。住戸はライフスタイルに合わせ、3タイプを用意した。家に大きな土間のある土間タイプ、2階からの光を期待した吹抜タイプ、2階にリビングと大きなテラスがあるテラスタイプの3種類である。温熱にも優れ、ライフスタイルを感じることができる住宅が設計された。

再生可能エネルギーの普及のために、全戸には太陽光発電をのせる。住宅の持主の費用負担の軽減を考えたサードパーティ方式^{*2}を採用した。これにより、自己負担がなく、ほぼプラスエネルギーの住宅群ができあがった。(竹内昌義)

*1 HEAT20 (2020年を見据えた住宅の高断熱化技術開発委員会)が目指す、室内温度環境と省エネルギー性能の水準。冬場の最低体感温度が15℃以上となることを指標とし、G2はその割合が最も高いレベル。(出典：2020年を見据えた住宅の高断熱化技術開発委員会ホームページより)

*2 10年間事業者がパネルを持ち、安い電気料金とする。その後、10年以降は無償で建主に譲渡する方法。

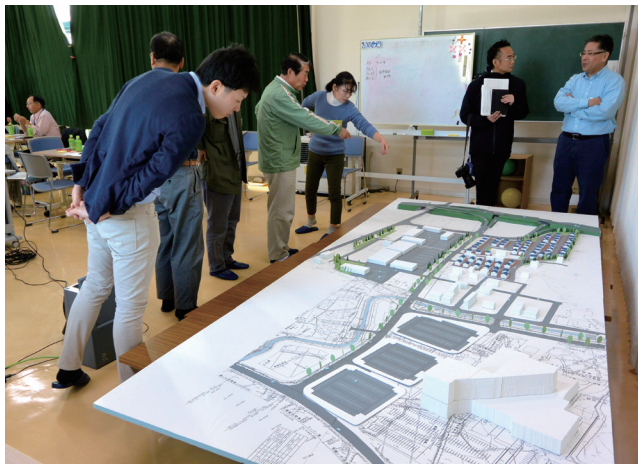


早戸温泉環境整備実習

近自然工法(動態である自然、生態系に配慮した空間形成技術)の課外実習を福島県三島町早戸温泉にて行った。招聘講師4名(廣瀬俊介、田賀陽介、阿部聡史、工藤まい)、渡部桂准教授が指導を担い、学科を中心に24名が参加。2010年から整備を進める遊歩道、林業作業路には、粗朶柵の施工を主として行った。また今回は、早戸温泉を擁する早戸本村から要望をいただき、集落内の整備も行った。整備の意義を理解いただき、面的波及があったことは実習の大きな成果であった。具体には集落内の畑の縁を空石積みで土留めし、管理の手が回らなくなっていた防火水槽周りの草刈りや、集落から連続する山裾の草刈りと高木の下枝払いを行い、集落の際を明るい空間にして喜んでいただいた。学生は技術的な研修に加え、その技術を地域社会の中で活用する意義を肌で感じる事ができた。滞在中、早戸本村主催の懇談会も行われ、かつての集落の生活や空間の様子、これまでの変遷の一部を知ることができ、今後の集落の在り方を共に考える貴重な機会を得た。次年度は活動10周年を迎える。空間整備技術の実証を続けると共に、地域経営を考える研修の場としての集落の可能性を引続き探していきたい。(渡部桂)



スギの人工林と一体となった空間整備



川西町メディカルタウン整備検討

山形県川西町は県南置賜地域の中心に位置する農業が盛んな町である。県立置賜総合病院が立地し、地域の救急医療の中心となっている。将来の人口減少が心配される中、町の特色を活かし、子育て世代の定着、日本版CCRCなどを見込んだ病院を核とするメディカルタウンが構想・計画された。渡部桂研究室が中心となり、学生とともに町民WSを開催しながらその具体像を検討する業務を行った。(渡部桂)



ドイツワークショップ

本学科OB、9期生の永井宏治氏を招いて2017年度は講演「土地の将来デザインが環境をつくる」を行ったが、本年度は学生有志を募集してドイツ型エリア環境分析ワークショップを行った。最初の永井氏の講義を受けた後は日独都市比較分析を行った。比較を行ったのは山形市と同規模の都市ブラウンシュヴァイク市である。ドイツのLプランをもとに土地利用の比較を行うとともに、航空写真による緑地や住宅などの違いが鮮明になった。こうした分析をもとに、日本の都市計画にも活かせるよう継続していく。(三浦秀一)



ツリーハウスプロジェクト

今年度はまず、本館7階ギャラリーで展示を行った。大空間の白い壁面を背景に過去に製作した模型と写真が整然と並び、これまでのツリーハウスプロジェクトの軌跡を一望することができ、またモバイルツリーハウスには子供のみならず大人たちも乗り込んで好評のうちに終わることができた。白鷹町中山地区での製作は、廃校跡地の活用を検討していた地元の人たちから依頼され、グラウンドに残された眺めの良い杉木立の中での製作となった。地元の人たちが計画したウッドデッキの製作には学生たちも関わり、そのデッキの上の木立にツリーハウスが作られた。本格的な建物(遊具)としての製作は、プロジェクトとして2年ぶりということもあり、設計の段階から慎重に検討を重ね、施工中の変更箇所もあったが、無事にツリーハウスは完成した。例年通り、学生たちは近くの公民館での自炊の合宿を経て遅くなった。また地元の人たちとの交流も盛んに行われ、信頼感を強めていった。お披露目会では、初めて神職によるお祓いの儀式も催され、地域の人たちに愛され活用されるツリーハウスは、太陽が昇るように地域の光となるよう、「hinode」と命名された。(山畑信博)



大学本館7階ギャラリーでの展示風景



山形リノベーションスクール

リノベーションスクールとは、街の物件を具体的に設定し、その活用の方法を2泊3日の合宿形式で企画立案、最後に建物のオーナーさんにプレゼンテーションするという実践的なワークショップ。現在、その手法が注目を集め全国約100程度の自治体で行われている。山形では4年前に開催し、シネマ通りのエリアリノベーションのきっかけとなった。今回も七日町周辺にある3つの物件を対象にし、学生を含めた約20人の参加者を集め行われた。

このスクールの最大の特徴は、周辺地域のリサーチ、企画立案、マーケティング、空間のデザイン、事業収支、そしてプレゼンテーションまで、プロジェクトを立ち上げるための流れを短時間に一気に学び、実行できることだ。

このスクールがエンジンとなって実際に動き始めたプロジェクトがいくつかある。参加した学生たちも社会人に混ざりながら、大学とは違うより現実に近いところからプロジェクトを組み立てる経験ができています。また集団の中で自分がどのように機能することができるか、自分のキャラクターや能力の種類について向き合う貴重な機会となっていた。(馬場正尊)



社会人に混ざり、実現に向けた企画立案を行う



撮影：Ono Gaku

山形R不動産

山形R不動産とは、山形に数多く眠る魅力的な空き物件を発掘、企画やデザインを加えることにより再生させるためのウェブサイト、そしてそれを中心にした活動の全般である。

今まで、このウェブサイトがきっかけとなり中心市街地の空き家を複数、再生してきた。古い旅館をシェアハウスに変えたり、普通の学生アパートをDIYが可能なカスタマイズ賃貸にしたり、この8年間で様々な活動を行ってきた。

参画する学生たちにとっては、物件や街を見立てる力を養うのと同時に、それを取材し、文章を書き、ときにはさらに魅力的にするためのデザインを考えるなど、リノベーションにまつわる総合的な経験を、このメディアを通して行うことができるのが大きな特徴である。

最近では、八日町の空き物件を学生たちの企画、設計により再生。実際にリノベーションしたマンションの一室を販売し、好評を得た。単なる学生内の活動にとどまらず、実践的にそれが経済活動を伴っているため、学生たちは社会のリアリティーを体感しながら活動している。(馬場正尊)



八日町のマンション改装



赤湯十分一山環境ツーリズムプロジェクト

赤湯十分一山環境ツーリズムプロジェクトは、南陽市赤湯十分一山一帯をフィールドとして、地元の「白竜銀河の森づくりプロジェクトチーム」と西澤高男研究室が2008年度より進めている環境・景観整備プロジェクトである。農業や林業などの第一次産業によって長年にわたって形成されてきた景観を、ツーリズムとの高度な調和によって維持・保全・活用することを目指す「環境ツーリズム」という新しい概念のもとに、複数の社会実験プロジェクトの実践とそのフィードバックをすることでそのあるべき姿を検証し、持続的活動に繋げていく。

2018年度はこれまでの実践を経て、十分一山での魅力的な体験をかたちにする社会実験として、モニターツアーとレクチャーで構成する2つの「環境ツーリズムワークショップ」を実施。モニターツアーワークショップでは2017年度に製作した「十分一山テラス」を拠点にピクニックをしながら、ガイドの方の案内で山の自然の楽しみ方を享受。レクチャーワークショップでは、「南陽スカイパーク」のログハウスを会場に、地域の方々と共に環境の魅力を生かした着地型観光のあり方について地産のワインを手に議論を交わした。(西澤高男)



モニターツアーワークショップの様子



北海道江差町 交流振興プロジェクト

北海道江差町にある「道の駅 江差」は、管理・物販棟の広さが8畳ほど、トイレを足しても45平米に満たない日本で最小の道の駅である。2018年3月、北海道大学大学院、北海道教育大学函館校と共に西澤高男研究室でエリアリノベーション案のコンペに参加した流れで、学生たちのアイデアを元にこの道の駅をリニューアルした。上記3大学と江差町、北海道建築士会檜山支部の協働で実行委員会を立ち上げ、クラウドファンディングを実施。目標額の200万円を上回る262万円の寄付が集まり、2019年2月より工事を開始。4月にリニューアルオープンを迎え、地域の方々や報道機関が集まり祝賀ムードとなった。

入口を入るとすぐカウンターと対面していた建物の海側に広く開口を設け、それに向けて斜めにカウンターを配置。天井裏を現しにして高さを確保し、日本海へと開ける眺望と併せて、建物のサイズを超える開放感を持たせた。壁は道南スギ、天井にはかつての名産のヒバ（現在は資源枯渇のため下北半島産）を目透かしで貼り、地産材の温もりと香りを内装に活かした。6月には外構のウッドデッキ製作を、学生たちの手により行う予定である。(西澤高男)

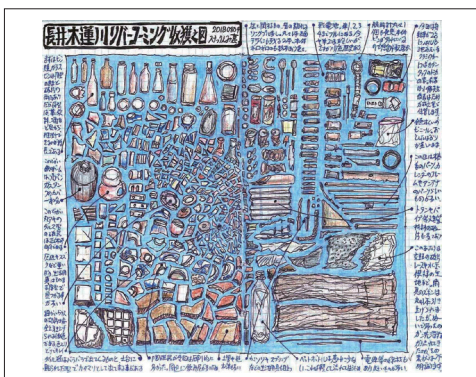


クラウドファンディングで盛り上がりを見せた



長井市文化的景観

2018年2月、全国で51番目、山形県内では大江町左沢地区に次いで2箇所目の国選定重要文化的景観となった長井市の町場景観については、これまでその選定にあたり志村、渡部研究室と両教員が調査検討委員、サポート役として地元行政に協力してきた。本年度は、選定後の具体的な景観整備を進めるための整備構想の策定と、町場に続き、地域の景観の主役の一つとなる水路の上流域に当たるいわゆる散居集落、屋敷林の分布状況分析調査を実施。また水路の清掃を通じて、水辺環境を知り、水路の大切さを学ぶ市民参加による水守りイベントを学生とともに支援した。整備構想のための現地建築調査では、景観の要となる「重要な構成要素」となる市内に分布する商家や蔵など21箇所113棟を数える歴史的建築物の分布、現状確認と所有者ヒアリング調査を計6回に渡り行った。ここでは個々の建築物の歴史変遷や価値についてはもちろん、傷みや維持する上での悩み、課題などについて所有者からの丁寧な聞き取りを重ねた。同行したゼミ生共々、こうした歴史的建築物の維持、管理の苦勞や現実的な課題について学ぶことが多く、こうした調査がリアルな学びの場となることを実感できた。(志村直愛)



水守りイベントでの収穫物の絵図



蔵プロジェクト

今年度は、山形市内の「蔵探し」と檐下宿の古民家山田屋でのセルフカフェとランプシェードづくりなどを行った。近年、檐下宿を訪れる観光客は急増し、蔵プロジェクトが手がけた山田屋を訪問する人たちも多くなっており、気軽に休める場としてセルフカフェの需要は高まっている。また木片を利用したランプシェードづくりでは、子供のみならず大人たちにも楽しんでもらえることができた。(山畑信博)



檐下宿の調査

上市市から委託された調査の一環として、史跡羽羽街道檐下宿における町割り調査と古民家の調査を行った。町割り調査では、敷地境界を特定する作業となったが、江戸時代から続く宿場町の概況が残されていることがわかった。また古民家調査では、現存する江戸期の建物の実測や、特に昭和期の農村生活や産業の変化に伴う住まい方と住居の変遷をたどることができ、この地区に特徴的な民家の類型を見出した。(山畑信博)

各種講演会



環境的未来型 山田貴宏氏

2018年7月11日、ビオフォルム環境デザイン室代表の山田貴宏氏を招き講演会を行った。地域材を活用した住宅や里山長屋などの事例を通し、生態系をモデルとした建築デザインのあり方が紹介された。近代建築から環境の重要性が問われる時代へと変わり、建築が再び自然との関わりを深めていかなければならなくなっており、森林の多い東北地方ではこうした設計思想が重要となると考えさせられる内容であった。(三浦秀一)



環境的未来型 河野直氏

つみき設計施工社河野直氏は、設計と施工者、オーナーの関係を今より近いものにしようと尽力されている建築家だ。自ら施工を行い、参加型のワークショップを企画、「ともにつくる」の実践をしている。今後高齢化が進み、職人が減ってくれば、一般の人が工具を持ってつくることも当たり前になってくるだろう。誰しものが自分の環境をつくれることはとても楽しい。つくることの学びは同時に、愛着に繋がる。共同作業を行えば、そこに新しいコミュニティが生まれる。(竹内昌義)



ワンデイプロジェクト 瀬川翠氏

建築家でありながら、同時にシェアハウスを経営する若手の建築家、瀬川翠氏を招いて、ワンデイプロジェクトが行われた。現代は様々な居住の形態が考えられる。シェアハウスもその一つ。若者が家賃と場所をシェアすることで、そこにコミュニティが生まれる新たな住まい方だ。テーマは、5人で住まう、「地域のためのシェアハウス」。どんな価値観の人々が集まり、どんな方法で地域との関係を築いていくか、そのためにはどんな空間があったらいいのか。時間や使い方のデザインも含めた、自由な提案が求められた。この5人という数字が、絶妙に難しい。分割しにくく、適当なバリエーションが数多く考えられる。

最優秀賞は川田匠の作品。公園に装置を設置することで、シェアハウスのように見立てた。一般的にはアイデアスケッチだけの作品が多い中、立体的な模型を作り、綺麗なプレゼンテーションも秀逸であった。このコンペは手のスキルよりも、一発のアイデアが評価される。毎年、下級生が上級生に勝つ下剋上を期待しているのだが、今年は順当に4年生が最優秀賞を制した。(竹内昌義)



最優秀賞 川田匠「シェアフィールドinシェアハウス」



新建新聞社
2018年7月
ISBN 978-4-86527-083-9

これからのリノベーション断熱・気密編 伊藤菜衣子・竹内昌義 他
これからの新築工事は高断熱高気密にして、エネルギー使用量を減らすことが求められるが、それだけでは十分ではない。既築の建物をどうするかが問われている。断熱改修は新築よりも難易度が高い。どこにどのようなことをすると効果的なのか、加えて幾らかけるべきなのかなど、変数が多い。本書では2020年の省エネルギー基準をクリアするべく、その範囲で何ができるか、どのような事例があるかを構成した、断熱改修に取り組む入門書である。実務向けの内容だが学生にもわかりやすくまとめた。ぜひ自宅の改装にも活かしてもらいたい。(竹内昌義)



学芸出版社
2018年6月
ISBN 987-4-7615-2682-5

公共R不動産のプロジェクトスタディ 馬場正尊 他
使われていない公共空間と民間企業とのマッチングを活性化するためのウェブサイト「公共R不動産」から生まれた本。国内外の先進的な公共空間活用事例を紹介している。デザインばかりではなく、それが生まれた社会背景、実現するためのシステム、制度や資本の流れなどを取材によって明らかにしている。事例だけではなくアイデアや提案なども豊富に盛り込み、実際にプロジェクトを動かし始めるときのきっかけや具体的な処方箋としても使えるように編集されている。(馬場正尊)



日経BP社
2019年1月
ISBN 987-4-8222-5888-7

公民連携の教科書 清水義次・岡崎正信・泉英明・馬場正尊
人口減少やそれに伴う税収不足を背景に、今後、行政サービスや公共空間の民間シフトが求められている。その両者が共同で事業を展開することを公民連携と呼ぶ。この本ではその成功例を分析、類型化することにより方法論としてまとめている。日本を代表する公民連携プロジェクト、アーツ千代田3331、水都大阪、紫波町オガールプロジェクトなどの実践者にインタビューし、そのプロセスや成功のポイントを示した。ダイアグラムやチャートを多用することで、実行に向けて役立つ教科書として使われることを想定し、編集している。(馬場正尊)



OPA PRESS
2018年6月
ISBN 978-4-908390-05-0

ブルーノ・タウトの緑の椅子
—1脚の椅子の復刻、量産化のプロセス— 緑の椅子リプロダクト研究会
80年以上前にブルーノ・タウトが試作し、日本滞在末期に居を構えていた高崎の少林山達磨寺にただ1脚現存する「緑の椅子」。強度試験による破損跡のある幻の試作椅子を、工学院大学鈴木研究室と本学西澤研究室が天童木工や宮城県産業技術センター、高度なフィギュア造形技術を持つデザインココと協働することにより、3DスキャンやNC切削、不等厚成型といった東北の最新のものづくり技術を駆使して現代に甦らせた。(西澤高男)

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2018

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2018

発行日 2019年7月27日

編集 西澤高男 笠原胡桃

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 田宮印刷株式会社

製本 田宮印刷株式会社

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail nyushi@aga.tuad.ac.jp



東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail nyushi@aga.tuad.ac.jp